東日本大震災の発生直後から被災住民を受け入れ、スタッフが一丸となって町の復興に尽力した「南三陸ホテル観洋」女将（おかみ）の阿部憲子さんにあの日からの歩みを取材する聖ウルスラ学院英智中の中学生記者

今できること プロジェクト

震災伝承新聞

発行 河北新報社営業局 2025.2.11

中学生記者 被災地駆ける

五橋中 東北大生と山元町へ 2
三条中 松島高生とまちあるき 3
聖ウルスラ学院英智 南三陸町で震災追体験 4

# 若い力で教訓を未来へ

東日本大震災の発生から14年。河北新報社の復興支援企画「今できることプロジェクト」では、次世代への伝承啓発のため、今年で5回目となる震災伝承新聞の制作に取り組みました。震災の記憶を持ち合わせていない中学生が宮城県内の被災地を訪れ、あの日から今に至る歩みを学び、発信する企画です。本特集は仙台市立五橋中学校、同三条中学校、聖ウルスラ学院英智中学校の3校の生徒23人が記者として被災地取材に挑戦、それぞれの視点で記事化したレポートです。震災の記憶と教訓を、世代を超えて未来へ―。学校や家庭、職場でご一読いただき、伝承のバトンをつないでいただければ幸いです。

国内初のＡＳＣ認証を受けた南三陸町戸倉地区のカキ養殖取材で、漁師が示すカキの幼生に興味津々の聖ウルスラ学院英智中のメンバー

松島湾を周遊する遊覧船の乗務員が自身の被災体験を伝える丸文松島汽船が運航する「語り部クルーズ」を体験乗船した三条中の中学生記者

山元町の震災遺構「中浜小学校」で語り継ぎに挑戦する東北大学地域復興プロジェクトＨＡＲＵのメンバーから説明を受ける五橋中の生徒

今できること プロジェクト 2024-2025 学び直しと伝承

私たち賛同企業も、再生と伝承のために「今できること」をともに考え、このプロジェクトに賛同し推進していきます。

企画・制作 河北新報社 営業局（今できることプロジェクト事務局）

IHI Realize your dreams / Asahi / 石巻市震災遺構 門脇小学校・大川小学校 / NTT DATA 株式会社NTTデータ東北 / Kao きれいを こころに 未来に / よろこびがつなぐ世界へ KIRIN / ケーズデンキグループ デンコードー / 劇団四季 / KBT 光輝ビルテクノス株式会社 / KOBELCO 神戸製鋼グループ / 乾杯を もっとおいしく。 SAPPORO / SUNTORY / JFE JFEスチール株式会社 / JTB 感動のそばに、いつも。 / 信用と創造 住友不動産 / 一般社団法人 生命保険協会 宮城県協会 / 仙台環境開発株式会社 / dic Color & Comfort DICグラフィックス株式会社 / 伝承千年の宿 佐勘 / TOA 東亜道路工業株式会社 / TOSHIN 東伸環境株式会社 / 日本製紙株式会社 / 日本製紙クレシア株式会社 / 一般社団法人 日本損害保険協会 SONPO / 日本郵便株式会社 東北支社 郵便局 / みんなに愛されるクルマ屋さん ネクステージ / あしたを、つなぐ ― 野村不動産グループ 野村不動産 / 東日本油化工業株式会社 / 平松剛法律事務所 / FUJISAKI / FUJIFILM 富士フイルムグラフィックソリューションズ株式会社 / みちのく企業グループ / MS&AD 三井住友海上 / 三井不動産 MITSUI FUDOSAN / 人を、想う力。街を、想う力。 三菱地所グループ / 三菱重工機械システム / 一般社団法人 宮城県建設業協会 / 車検・点検はセーフティーステッカー運動実施中の会員工場へ 一般社団法人 宮城県自動車整備振興会 / 宮城交通株式会社 / みやぎ生協 / 明治安田 / RICOH リコージャパン株式会社

（順不同）

◎後援／宮城県、仙台市、石巻市、松島町、南三陸町、山元町、宮城県市長会、宮城県町村会、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会

今できることプロジェクトとは・・・ 東日本大震災が発生した翌年2012年より、震災の伝承や防災啓発、風化の防止を目指して取り組んでいるプロジェクトです。毎年、河北新報社が読者と賛同企業とともに「何ができるか」を考えアクションしており、真の復興を果たすべく継続して取り組んでまいります。

河北 今できること 検索

［お問い合わせ］今できることプロジェクト事務局 河北新報社営業部 tel 022-211-1318

# 若き語り部デビュー

## 東北大生２人 山元の震災遺構中浜小で案内

井上さん(中央)から語り部の指導を受ける遠藤さん(右)と貫洞さん＝2024年7月

津波の高さを示す模型のアクリル板に目線を合わせ、中浜小の校舎２階の天井近くまで津波が達したことを確認する五橋中の生徒

【2年公平佐保子、小関菜奈】

「津波の威力を想像してみてください。ここは海から約400㍍。秒速10㍍、高さ10㍍の津波が襲いました」。山元町の震災遺構中浜小で、2階の壁に掲示された津波到達を示すプレートや倒れた時計台を指さしながら津波の脅威を伝えます。

ボランティア団体「東北大地域復興プロジェクトHARU」のメンバーで、共に農学部2年の遠藤てまりさん(19)＝福島市出身＝と、貫洞美月さん(20)＝東京都出身＝に中浜小を案内してもらいました。この日が2人の語り部デビューです。

### 貫洞さん「熱意込め伝える」
### 遠藤さん「聞く人思い説明」

2人は地域おこしのイベント運営を手伝うHARUの活動で山元町を何度も訪れていました。住民らと交流を深めるうち、中浜小を拠点に伝承活動に取り組む「やまもと語りべの会」が会員の高齢化が進み、次世代の担い手の確保に苦慮していることを知りました。

震災当時、2人は6歳で津波被災の経験はありません。「震災を知らないに等しい私たちにしか伝えられないこともある」と語り部への挑戦を決心したそうです。

仙台からJR常磐線で約50分、中浜小まで徒歩約30分の道のりを往復して、同会会員で当時校長だった井上剛さん(67)ら語り部の先輩から計4回の実地研修を受けました。語り部に必要な知識を学び、自分で原稿を考えて臨みます。

貫洞さんは「被災経験がないので、どうしても『〇〇だそうです』という伝聞の語尾になってしまいます。他の語り部のような熱意で、どうしたら分かりやすく伝えられるかが難しいです」と悩みを教えてくれました。遠藤さんは「年齢や地域によって興味や関心が違います。それぞれに合わせた説明を心がけたいです」と話します。

中浜小の児童らは、教員の誘導で屋上の屋根裏倉庫に逃げ、90人全員が助かりました。2人は「さまざまな偶然が重なり奇跡的に助かりましたが、偶然で片付けてはいけません」と災害に備える大切さを強調します。災害への備えがないことを「テスト対策をしないでテストに臨むようなもの」と、私たち中学生に分かりやすく説明してくれました。

初の案内を終えた2人は「まだまだ実力不足。もっと中浜小について学び、良い語り部になれるように精進したいです」と決意を新たにしました。2人は大学を卒業しても語り部を続けると決めています。中浜小を訪れた人が「家に帰ったら、絶対に防災の準備をしよう」と思うような語り部を目指しています。

**仙台市立 五橋中学校**

仙台市青葉区五橋
2-2-1
生徒：696人

私たち仙台市立五橋中学校2年生8人は昨年9月14日、宮城県山元町を訪ねました。ボランティア団体「東北大地域復興プロジェクトHARU」の学生2人に東日本大震災遺構中浜小を案内してもらいました。震災当時はまだ幼く、津波被災を経験していない2人が語り部に挑戦する姿を取材しました。町内を巡り当時の被災状況を学び、防災機能を備えた「つばめの杜ひだまりホール」も見学しました。農業生産法人「やまもとファームみらい野」では、津波被害を受けた土地でサツマイモなどの大規模生産に取り組む苦労を聞きました。

# 「学んで助かる命ある」

## 山元町内や防災拠点見学

磯崎山公園への階段を駆け上る五橋中の生徒

【2年尾形晟士、小田遼太郎、後藤成槻】

「てっぺんに着くまで、どのくらい時間がかかるでしょう」。バスに同乗し山元町内を案内してくれた「やまもと語りべの会」の菊地正己さん(73)の号令で、磯地区の高台にある磯崎山公園のあずまやまで全力で駆け上がりました。

高さ10㍍程の公園には津波から逃れようと住民が避難しました。海水が迫り、さらに奥まで逃げて助かることができたそうです。

菊地さんは「避難場所までの移動に必要な時間を前もって知っておくことが大事です。両手を広げた長さや歩幅なども把握しておくと役に立ちます」と教えてくれました。

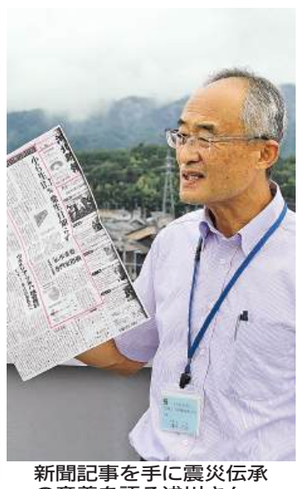
山元町では600人以上が犠牲になりました。菊地さんは「避難できる時間が約1時間あったにもかかわらず多くの犠牲者が出た」と悔やみます。「もう少し防災について学んでいたら助かる命があったかもしれません。だからこそ防災に興味を持ってほしい」と話しました。

37人が犠牲になった常磐山元自動車学校跡地の慰霊碑に立ち寄りました。春休みだったため、高校を卒業したばかりの教習生が多く犠牲になりました。慰霊碑には地震発生後も学校の業務が継続され、避難が行われなかった結果、犠牲が出た経緯が記されています。

2017年に整備された町防災拠点・山下地域交流センター「つばめの杜ひだまりホール」も見学しました。普段は地域の交流拠点ですが、被災状況を伝承する防災学習コーナーがあり、災害時には避難所になります。

外には手押しポンプで水を流せる「マンホールトイレ」や炊き出しに利用できるかまどを備える「かまどベンチ」がありました。地下には約4400人の3日分の飲料水が確保できる貯水槽もあります。倉庫には食料品や救急セット、毛布などが備蓄されていました。

町内の被災状況を説明する菊地さん


新聞記事を手に震災伝承の意義を語る浅川さん

案内してくれた浅川光喜所長(65)は「備えること、学ぶことから助かる命があることを知っていてほしい」と話し、三つの備えについて教えてくれました。備蓄品を用意しておく「物の備え」、最善の選択ができるように普段から心がける「心の備え」、避難訓練やハザードマップを確認しておく「行動の備え」の三つです。

浅川所長は、震災の発生年月日を正確に答えられた小学6年生が17・7％にとどまった新聞記事を紹介し「震災を風化させないように、若いみんなには次世代に伝えていく役目があります」と訴えました。

## 農業法人やまもとファームみらい野

# 浸水域で栽培 工夫重ねる

年間を通して出荷するネギの下処理作業。被災農家の雇用確保にも貢献している

【2年佐々木悠人、菅原瑠唯、芹田大助】

JRの旧常磐線跡にできたかさ上げ道路東側の海岸線に沿って、山元町の農業生産法人「やまもとファームみらい野」のネギ畑が約南北8㌔にわたり広がっています。この辺りはイチゴの一大生産地でしたが、栽培施設や住宅は東日本大震災の津波で流されてしまいました。

津波浸水地は、農地として活用することになりました。2015年に被災農家などが協力して大規模・機械化農業に取り組むみらい野を設立しました。

島田孝雄社長(70)は「宅地だった農地は50㌢掘るだけでがれきが出てきてしまい、農機具の部品の消耗も早いです」と説明します。現在はイチゴ、トマトといった施設栽培と長ネギ、サツマイモなどの露地栽培をしています。

やせた土地でも栽培可能なサツマイモを選びましたが、がれきが多い畑で育ったイモは小さく、掘り上げると傷がつき、品質が落ちてしまいます。形を問わない干し芋に加工するため、加工場を作りました。21年からは香港への輸出も始めました。輸出では小さいイモが好まれることや焼き芋ブームの後押しもあり、需要を獲得できるようになりました。

大型農業機械に乗る島田社長

### 島田社長「収量と品質 上げていく」

18年には、地力を上げる緑肥として、ヒマワリを植えました。花が咲き終わると、畑にすき込みます。畑の土が風で飛ぶのを防ぐ目的もありました。「この辺りは殺風景だったので、彩りがあればいいと考えました」と島田社長。今では多くの人が観賞に訪れ、お祭りが開催されるなど、町のシンボルになっています。

再生した農地の利用度を上げるため、22年からは牧草の生産にも挑戦しています。国内自給率を高める狙いもあります。1年目はうまく育たなかったのですが、関係者と協力して地力を上げ、販売可能な牧草を栽培できるようになりました。

島田社長は、みらい野の歩みを振り返り「まだ目標の半分くらいしか、成し遂げていません。でも土壌のせいにはしたくない。今後は収穫量と品質を上げていきたい」と語りました。「挑戦したいことがあれば実践してみることが大切。しかし、やりたいことだけやってはだめです」と、中学生にエールを送ってくれました。

## 聞いて！　知って！　同世代へのメッセージ

### 風化させず伝えていく　尾形　晟士　2年

「震災のことを多くの人に伝えてほしい」という被災者の思いがありました。テレビなどで見るよりも、直接話を聞いた方が被災者の強い思い、震災の恐ろしさやすさまじさが伝わります。「自分には関係ない」ではなく、実際に被災者の話を聞いて、学んで、備えることが大切だと学びました。震災を風化させずに、私たちの世代が未来まで伝えていくことがとても重要です。

### 地震直後の避難難しい　小田遼太郎　2年

菊地正己さんの「津波到達まで逃げるのに十分な時間があったにもかかわらず、なぜ600人以上が犠牲になったのだろうか」という言葉が印象に残りました。地震発生直後の怖い、絶望、悲しいなどのいろいろな感情がある中で、避難するのはとても難しいことです。日頃から災害について考えていないと落ち着いて避難はできません。備えることの大切さを強く感じました。

### 震災をもっと知りたい　公平佐保子　2年

震災当時の記憶がないので、どこか遠い存在のように感じていました。しかし今回、山元町で被災を経験した人や語り部から直接話を聞き、震災の恐ろしさや防災の大切さを肌で感じることができました。今では、もっと震災について知りたいと思っています。地震や津波はいつ、どこで、どのような規模で起きるかは分かりませんが、その時のために備えることは可能です。

### 記憶引き継ぐ責務ある　小関　菜奈　2年

震災で祖母を亡くし、母から震災についての話を聞きながら育ちました。そのため、幼い頃から被災者や祖母がどんな思いを抱いていたのか興味がありました。私たちは「震災を経験した最後の世代」として「経験していない世代」へ記憶を引き継ぐ責務があります。災害は、いつどこで起こるか分からないからこそ「自分には関係ない」と線引きしてはいけないと思います。

### 「戻るな」伝える存在に　後藤　成槻　2年

震災遺構中浜小を見学し、被害のすさまじさを改めて感じました。菊地正己さんの「思い込みほど怖いものはない」という言葉が今後の参考になると考えました。過去の歴史から「地震はあったが津波は来ない」と思い込み、家に残った人や漁船を見に行って亡くなった人が多かったそうです。教訓を無駄にせず、全員が助かるよう、「戻るな」と伝えられるようになりたいです。

### 今を生きる大事さ知る　佐々木悠人　2年

多くの命と生活が奪われたことを知ることができました。HARUの2人は語り部に深い思いがあり、感動しました。ふとしたきっかけで語り部を始めましたが、今は卒業しても続けたいと強く思っているそうです。今回、私は友達に誘われて参加しましたが、とてもいい経験になり、今生きていることの大事さを知ることができました。培った知識を若い世代に伝えていきたいです。

### 農業再生の苦労知った　菅原　瑠唯　2年

山元町を訪れる前は、震災の被害状況について全く知りませんでした。震災後の農業で苦労した話や当時の被害状況を語り部から聞き、被災地の悲惨な状況を知ることができました。自分が災害にあったときのことを想像して、どのような対策ができるか考えておくことが大切だと学びました。今回学んだことを将来、震災を経験していない子どもたちに教えていきたいです。

### 消防団員の勇気に感動　芹田　大助　2年

被災地で活動していた消防士の父に幼い頃から震災のことを聞いていたので、震災への関心がありました。今回、津波が目前に迫っていた花釜地区で、人命救助に向かった消防団員の話を聞き、勇気と行動力が素晴らしいと感じました。震災について知らない人も多いので、災害への意識をしっかりと持ち、今後発生が予想される南海トラフ地震の対策にも備えていきたいです。

# 三条中新聞

仙台市立
三条中学校

仙台市青葉区
三条町3-1
生徒：210人

私たち三条中学校の1、2年生8人は、昨年9月21日、宮城県松島町を取材しました。松島町の高台で避難所がある三十刈駐車場で松島高観光科2年の男子生徒4人と合流し、避難路について話を聞きながら県道を下ってJR松島海岸駅に到着。本堂の手前まで津波が押し寄せた国宝の瑞巌寺境内を視察しました。その後、松島観光協会会長の志賀寧さん、松島湾の遊覧船で語り部を務める横山純子さんの話を聞き、「今日」を生きていられることの意味について考えました。

## 安全な松島観光へ努力

### 地元高校生、ガイド中の避難誘導訓練

### 津波警報想定、抜き打ちも

【1年新井悠斗・佐藤レア】

日本三景に数えられる松島町の松島海岸の魅力発信活動に取り組む松島高観光科（定員80人）は、2014年に県内で初めて設置された観光に関する教育を行う学科です。観光科2年の沖津蓮さん、佐藤亜美斗さん、西原瑠輝亜さん、今野凌太さんの4人に、観光ガイド活動をしていたときに津波警報が出た際の対応や、震災時の被害などについて町内を歩きながら教えてもらいました。

集合したのは松島町の高台で、避難所がある三十刈駐車場。「本来は観光施設がある海岸部から避難路である狭い坂道を上って避難するのですが、今回は人数が多いので広い県道を下ります」と観光科の生徒が説明してくれました。

駐車場から県道を下り、JR仙石線の高架橋をくぐって国道45号に面する松島海岸駅までの約500㍍を歩きました。県道を正式な避難路としていないのは、「高架橋下が冠水して通れなくなる可能性があるため」とのこと。坂を下りきると海は目と鼻の先。国道45号沿いには飲食店や土産物店が連なっていて、私たちが取材した9月21日は大勢の観光客であふれていました。

案内されたのは国宝で、松島湾のほど近くに山門がある名刹の瑞巌寺です。津波は山門から本堂に向かって押し寄せましたが、150㍍進んだ場所で止まり、本堂は津波被害を受けませんでした。しかし、境内に立ち並んでいた杉の巨木は塩害で枯死し、700本が伐採されました。

観光科の生徒は松島の観光ガイドを務めることがあります。ガイド中に大きな地震が発生するかもしれません。そのため定期的に避難誘導訓練が行われます。3年生が2年生をガイド中、地震が発生したという想定です。発生時刻は知らされず、抜き打ちです。町内のどこにいても、適切なルートを選択して一次避難場所である松島防災センターを目指すそうです。

私たちは観光科の4人にいろいろ質問をしました。松島の復興程度については、「建物は直ったが人の心の傷は癒えていないと思う」「震災を語り継ぎ、教訓を伝えることが復興につながるはず」という答えが返ってきました。

町の観光発展につなげるため、観光科は震災でほぼ壊滅した松島湾の藻場の再生に取り組んでいるとのこと。「砂を固めた『砂団子』を湾内に投げ入れるなどして、再生活動を展開しています。海藻のアカモクを使ったどら焼き『どらモク』を開発しました」と教えてくれました。

興味深い話が多く、とても勉強になりました。

松島瑞巌寺の津波到達点を示す標識について三条中の記者に説明する松島高観光科の高校生

瑞巌寺参道入口の山門から150㍍地点まで津波が到達したことを示す標識

## 援助隊到着「心強かった」

### 松島観光協会長 志賀さん

### 震災対応で陣頭指揮「初めての津波に恐怖」

【2年米澤名都・庄子杏奈・石川七翔】

「災害の規模すら分からない混乱のさなか、長野県の緊急消防援助隊が真っ先に応援に駆けつけてくれたときの心強さは今でも鮮明に覚えています」。

松島観光協会の会長で、震災発生時は塩釜地区消防事務組合の消防本部次長兼消防危機管理監を務めていた志賀寧（やすし）さん(71)はこう振り返りました。

私たちは松島防災センターで志賀さんに取材しました。震災対応の陣頭指揮を執った志賀さんに、松島町の被害状況や、他県から応援に駆けつけてくれた緊急消防援助隊の活躍などについてうかがいました。

「津波が来る前は『スーパーの天井が落ちた』という救助要請があっただけでしたが、津波で被害が一気に拡大しました」。志賀さんは話します。気象庁の大津波警報発表を受け、指令課職員と志賀さんだけが本部2階に残り、職員と消防車などを塩釜市体育館がある高台に移動させ、体育館に対策本部を設置しました。

津波の第1波が消防本部に襲来したころ、20人以上の市民らが消防本部に避難してきました。松島を襲った津波は他の地域のように強力な勢いで押し寄せるのではなく、徐々に水かさが上がる感じだったそうです。

「松島湾内にある260余りの島々が消波ブロックの役割を果たしたのではないか」と志賀さんは推測します。それでも津波の威力は侮れず、消防本部には市民の手で重篤な患者も運び込まれました。「宮城県沖地震（1978年）を体験し、新潟県中越地震（2004年）で実家が被災したけれど、津波の恐ろしさを知ったのは初めてだった」と硬い表情で語ります。

消防本部管内にある製油所での火災発生、数え切れないほどの遺体の収容や救助要請への対応など緊張が続く中、震災発生翌日から長野県をはじめ、岡山県などから緊急消防援助隊が応援に駆けつけてくれたのは「心強かった」としみじみ話します。

松島の観光地は震災やコロナ禍を経て、かつてのにぎわいが戻ったように見えます。

志賀さんに松島町の復興程度を尋ねると、「震災前を1とすると今は0・5ぐらい」と厳しい見方。「観光発展につながる松島の資源を生かし切れていない」と指摘した上で、「地元関係者が観光発展のため一丸となって取り組んでほしい。まだまだ伸びる余地はあるはずだ」と自分に言い聞かせるように言いました。

松島観光協会会長の志賀さん

## 「日常は突然奪われる」

### 語り部クルーズ・横山さん

### 悲惨な光景 胸に活動

【2年二本柳昊・1年鴇田遥一・昆野穂奈美】

松島町の松島湾内を巡る丸文松島汽船の語り部クルーズで、東日本大震災の語り部を務めるのは横山純子さん(66)です。クイズを出したり、客と明るい口調で対話したりしながら語り部を務めます。

私たちが乗船したのは約50分で湾内を回るコースです。震災の地震や津波で一部が崩れてしまった島があることなどを横山さんから説明を受けながら遊覧しました。

湾内で数少ない有人島・桂島（震災当時の人口約230、昼間約160）にさしかかると、横山さんは「島にある半分以上の家が流されてしまったけど、犠牲者は出なかった。足腰が弱っていたり、頑固に避難を拒んだりする高齢者を、消防団員らが軽トラックの荷台にのせて高台に避難させたから」と、小さな島だからこそできた避難活動について解説してくれました。

自らの被災体験についても話します。松島町に隣接し、海に面する東松島市野蒜地区で両親と一緒に暮らしていた横山さんは、両親が震災の犠牲になり、自宅も失いました。

「遊覧船再開直後、お客さんに『私は被災しなかった』とうそをついていました」と振り返ります。「話し出すと止まらなくなるかもしれない」と思ったからだそう。でも、語らなければ震災は忘れられてしまうかもしれない。こんな思いから、語り部を務めることを決めたといいます。

心に刻むのは、「いつも通りの明日は来ないかもしれない」ということ。横山さんは震災当日の朝、寝坊して両親に八つ当たりしてしまいました。出勤する途中、「帰ったら謝ろう」と思いましたが、謝ることはできませんでした。震災翌日、やっと戻った野蒜地区で見たのは、遺体がごろごろ転がる地獄のような光景でした。

ある日、修学旅行で訪れた中学生にこの話をしたところ、男子生徒が泣きながら「なぜそんなに悲しい話をするの」と訴えたそう。横山さんは「死にたくなくても死んでしまった人がたくさんいた。明日が来ない人もいるんだよ」と言うと、男子生徒はなんとなく納得した様子だったといいます。

私たちは震災で肉親を失った方の話を直接聞いたのは初めてでした。癒えることがない悲しみを抱えながら語り部を務める姿に、胸が締め付けられる思いでした。

丸文松島汽船の語り部クルーズで震災体験を話す横山さん

## 聞いて！　知って！　同世代へのメッセージ

### 自分の行動見直す契機　石川 七翔 2年

震災を経験した方の体験談は重みがあり、写真や映像では分からない部分を知ることができました。語り部クルーズの横山純子さんの「明日はいつも通りには来ないかもしれない」という言葉は、自分の普段の行動を見直すきっかけになりました。今できることを先延ばしにすると、一生後悔するかもしれません。今回の取材の体験を、ずっと今後に生かしていくつもりです。

### 家族と防災を話し合う　庄子 杏奈 2年

いろいろな方々にお話を聞いて震災時の大変さや怖さを少しでも知ることができました。以前、親に少しだけ東日本大震災のことを聞いたのですが、そのときはイメージできませんでした。地震などの大きな災害に遭ったときの対策や被害軽減策について、家族で話し合う必要性を実感しました。自助だけでなく、共助についても積極的に取り組めたらいいと思いました。

### 今後も震災学び続ける　昆野穂奈美 1年

取材を通して「明日は普通に来ないかもしれない」ということを同世代の人たちに伝えたいと思いました。これは語り部クルーズの横山純子さんの言葉です。私はいつも通り明日が普通に来ると思って生きてきました。でも、横山さんの話を聞いて考えを改めました。感謝や謝罪の気持ちはすぐ相手に伝える。明日では遅いかもしれないのです。私は震災のことをもっと知りたいと思いました。

### 当たり前ではない毎日　米澤 名都 2年

震災を知らない人に伝承していくのはとても難しいことだと思います。震災の記憶がない私は、震災を自分事として捉えられませんでした。何げない日常が明日も明後日も続くのが、当たり前だと思っていました。震災を実際に経験した方々の不安や恐怖は、私は同じ状況に遭わない限り理解できないと思います。それでも今回学んだことを次の世代に伝えなければと思いました。

### 災害を自分事と考える　鴇田 遥一 1年

震災について今まで他人事のように捉えていました。一番印象に残ったのは、桂島の住人の犠牲者がゼロだったことです。かつてのチリ地震津波の経験を踏まえ、津波が来ると予想して高い所に全員が避難したそうです。災害を自分事として捉えて行動することで、助かる命が増えることを知りました。伝えることの大切さ、自分事と捉える大切さを学びました。

### 印象に残った津波の話　二本柳 昊 2年

取材を通じて防災や減災、避難が重要であるかを再確認しました。特に津波についての話がとても印象的でした。松島町を襲った津波は湾内の島々が消波ブロックの役割を果たしたので、他地域より被害は少なかったのですが、それでも被災した人には深い心の傷が残りました。私たちのように震災の記憶がない世代に、取材で得たことを伝えたいと思いました。

### 平和な日々に感謝する　佐藤 レア 1年

取材という初めての経験を通して多くのことを学び、大切なことを感じました。本音を引き出せる質問を考えるのが大変でした。取材を受けてもらった方々からは津波の恐ろしさを聞くことができ、「自分も震災のことを後世に伝えなければいけない」と改めて思いました。今回の経験を踏まえ、平和な日々は当たり前だと思わず、感謝の気持ちを持って過ごしていきたいです。

### 語り継ぐ人増やしたい　新井 悠斗 1年

「明日が来るのは当たり前じゃない」という話が印象に残りました。大切な人とけんかしたまま会えなくなるかもしれません。改めて何事もなく幸せに過ごしている日々の大切さを知りました。震災に初めてきちんと向き合えたと思います。今回の取材で得たことをずっと忘れず、自分事としてとらえて後世に語り継ぎたいし、語り継ぐ人が増えればいいと願っています。

# ウルスラ新聞

**聖ウルスラ学院英智中**
仙台市若林区一本杉町1-2
生徒：188人

私たち聖ウルスラ学院英智中の9年生3人と8年生4人は、昨年8月22日に宮城県南三陸町を訪ね、東日本大震災の被害と復興への取り組みを取材しました。南三陸ホテル観洋では、震災の教訓を風化させないという思いを感じました。若手漁師グループ「戸倉Sea Boys」の皆さんの、どんな状況でも諦めまいとする意思に心を打たれました。自然の恐ろしさや命の重さ、そして心に大きな傷を負っても前へ進む人の強さを学びました。

# 避難誘導 判断の連続

## 地震発生当時 南三陸の現場では

### ホテル女将 心折れた住民を励ます
### 会館の職員 来館者とどめ犠牲防ぐ

【9年佐藤えれな、8年木村咲彩・嶋悠花】

志津川湾に面して建つ南三陸ホテル観洋の女将（おかみ）・阿部憲子さんは、震災発生時、ロビーでお客さんと一緒にいました。揺れが収まった後、ホテルのスタッフは津波を警戒し、滞在中の宿泊客を高台にある託児所に誘導し、阿部女将はホテルに残り、続々と避難してくる住民に対応しました。中には心が折れた人もいて、阿部女将は「気持ちを強く持って」と何回も呼び掛けました。

道路が寸断しライフラインが断たれたホテルは孤立状態となります。雪が降る厳しい冷え込みの中、スタッフはお客さんや住民を最優先に行動しました。「そうした姿勢が多くの命を助けることにつながったのでは」と阿部女将は当時を振り返ります。

南三陸ホテル観洋女将の阿部憲子さん

阿部女将が印象深く覚えているのは、震災の約1カ月後に食事処「海フードBBQ」を再開した時のことです。南三陸はまだ活気がなく、来店者があるか不安だったそうです。そんな中、入社1年目で19歳の男性スタッフが自主的に「営業中」と書いた看板を道端で掲げてくれました。それを見た人々が次々と訪れました。長期間、避難所となったホテルでは10～20代が活躍したといい、阿部女将は「復興には若い力が絶対必要。若いからこそできることを考えて」と話していました。

ホテルが運行する「語り部バス」にも乗車しました。阿部裕樹副支配人の説明で、今は空き地となった戸倉小学校跡ほか、戸倉公民館、高野会館を巡りました。戸倉公民館は発災当時、戸倉中学校で、壁の時計は津波が襲った午後2時48分を指して止まっています。阿部副支配人はそこを指して言いました。「あの時計は今この瞬間、皆さんに見てもらうためだけに残してあります」

高野会館ではバスを降りて建物内に入りました。館内は津波で壁紙がはがれ、まるで建築中の建物のよう。発災当日は地域の芸能発表会があり、多くの高齢者が3階にいました。地震直後、来館者は「津波が来る前に高台に行け」という言い伝え通りに逃げようとしますが、会館スタッフは「避難が間に合わない」と判断し、館内にとどまるよう呼びかけました。

津波の水位は刻一刻と上昇し、最終的には屋上まで逃げて膝の下まで水につかりながら、結果的に327人の命が救われます。当時の館長は、もし全員が助かっていなければ、自分は地域の人に顔向けできなかっただろうと、今でも考えるそうです。

高野会館や戸倉公民館、そして戸倉小学校跡は全て、人々が日常を過ごしていた場所です。私たちの日常も、災害で奪われることがあるかもしれません。万が一の時に、私たちが生き延びるためにも、震災を深く知り、教訓を語り継いでいく必要があると実感しました。

高野会館の屋上への階段室に残った津波の痕跡を確認する生徒たち

# 復活の「戸倉っこかき」に自信

## 若手漁師集い養殖方法研究
## いかだ減らし品質向上

中学生記者たちは船で海に出て、戸倉Sea Boysの後藤伸弥さんからASC認証を受けたカキ養殖について説明を受けた

【9年岡部佐和子、8年高橋芽衣子】

目の前に広がる志津川湾を前に、南三陸・戸倉地区のカキ漁師後藤伸弥さんと後藤新太郎さんは、戸倉のブランド「戸倉っこかき」について「自信のあるものを作れている」と胸を張ります。2人は地区の若手漁師4人で結成した「戸倉Sea Boys」のメンバーです。私たちを漁船で養殖施設に案内し、震災後のカキ養殖の変化について教えてくれました。

震災前のカキ養殖は、生産量を上げるため漁師1人につき養殖用いかだを20～30個設置していました。過密状態のカキは養分が不足し出荷まで3年を要し、その間の出荷量が減るため、いかだの数を増やす…という悪循環に陥っていました。

そこに震災が発生し、自宅や漁船、いかだ、作業場など全てを失います。漁の再開に向けて過密養殖を続けるかどうか漁師たちは何度も議論を重ね、漁協組合員が合意のもと、いかだの数を減らしました。隣り合う養殖いかだの間隔を震災前の15㍍から40㍍に広げ、数は3分の1に。その結果、格段に品質の良いカキを1年で生産できるようになり、作業の負担も改善され、若い漁師が増えました。

戸倉地区は2016年に、カキ養殖で国内初のASC認証を取得しています。この国際認証は水産物の持続性と環境への負荷軽減を目指す制度で、それだけ環境に配慮した責任ある養殖管理を行っていることにより、安心してカキの生産を続けられるそうです。現在の生産量は150㌧を超え、売り上げも増えました。シーズン中は主に生食用をこだわりを持って生産。春先にはカキの身が抜群に大きく育ち加工にも適しているそうです。

漁師の皆さんは、自分のカキ棚の位置を、船の上から見る景色で感覚的に覚えるそうです。震災直後には失われていた景色や自然も、多くの人の復興への努力によってその姿を取り戻しつつあります。戸倉地区の漁師の皆さんも震災前よりさらに良いカキを作るために努力しています。そうした前向きな姿が、消費者をさらに魅了しているのかもしれません。

# 迫る地震、津波 素早く正しく動ける？

## 伝承施設で「ラーニング」
## 考える意義学ぶ

【9年鈴木悠真、8年佐藤智埜】

「実際に地震が起き、大津波が迫る中、あなたは素早く正常な判断をすることができるでしょうか」―。東日本大震災伝承施設「南三陸311メモリアル」の「ラーニングプログラム」で、そんな問いに対して参加者同士で考えました。プログラムは2024年4月にリニューアルし、私たちが震災から何を学び取るのかを、より深く考えることになります。

会場の「ラーニングシアター」は正面と左右に大きなスクリーンがあり、さまざまな向きの椅子が並んでいます。町を津波が襲う様子や、当時の町民の証言映像を見ながら、防災に関するさまざまな問いについて、そこにいる人たちで共有し考えを深めます。

今回の取材では「家にいる時に地震が起きました。家族と一緒に避難所に逃げましたが、家にスマートフォンを置いてきてしまいました。取りに帰りますか」という問いがありました。まず、一般の参加者も含めて自分の考えを決めました。この時点では取りに帰る人と帰らない人は半数に割れましたが、数人のグループに分かれての1分間の意見交換が終わると、意見が変わった人もいました。

この他「漁業を続ける上での葛藤があり、自分ならどうするか」などの問いかけもありました。私たちはその場にいるような雰囲気の中、設問ごとに考えを深め、意見交換をし、考えをまとめていきました。施設チーフの吉岡一浩さんは「どの考えが正しいということはない。考え続けることが大事です」とアドバイスをしてくれました。

施設には、当時の映像や写真パネルなどの展示物があります。その中に、さび付いた四角い缶を積み上げた芸術家の作品がありました。あえて倒れやすいように缶が組み上げられており、それぞれが震災で失われた命、命の個性を表しているそうです。

南三陸311メモリアル　ラーニングシアターで居合わせた一般の来場者と語り合う中学生記者たち

ラーニングプログラムや展示物を通して、自分自身の考えと向き合い、見つめ直すことができる施設でした。

# 聞いて！　知って！　同世代へのメッセージ

### 未来目指す姿勢に感銘　岡部佐和子　9年

実際に被災地を訪れて、今に至るまで私が過ごしている時間は震災で亡くなった方の過ごしたかった時間なのだと考えて、防災、減災の大切さを身にしみて感じました。取材先で被災や復興への歩みを語る人たちは、ずっと未来を見て生きてきました。かけがえのない人や大切なものを失っているはずなのに、明るい未来を目指している姿を見て、とても驚き、そして尊敬の思いを抱きました。被災地に足を運んで学ぶことの重要さを実感した一日でした。

### 自分にできること探る　木村　咲彩　8年

特に印象に残ったのは「私たちにできることを考えるのが大事」という南三陸ホテル観洋の女将・阿部憲子さんの言葉です。新聞などで、被災地への多額の寄付や現地での支援活動について読んでも、私にはこうした活動は難しいと考えていました。しかし、この言葉を聞いて「少額でも寄付などで貢献ができる」と自分にできることを考え直しました。取材に参加して、後世の人たちに震災について考えてもらえる活動がしたいと思うようにもなりました。

### 迫る津波の恐怖追体験　佐藤えれな　9年

語り部バスの体験が強く印象に残っています。跡形もない戸倉小や、戸倉公民館で津波到達時刻のままの時計を見て、私たちと同世代の人たちが感じた津波の恐怖を追体験しました。シャンデリアの破片やはがれ落ちた壁紙など、あの日のまま残されている高野会館を案内いただいた阿部裕樹副支配人のお話から、懸命に避難する人々の当時の様子が目に浮かびました。自然の営みとともに生きていく私たちは、防災に努めなければならないと強く感じています。

### 南三陸の苦難忘れない　佐藤　智埜　8年

震災を風化させないよう後世に伝えてゆく必要があると強く思いました。多くの人や物が被害を受け、葛藤や苦難を乗り越えて今の南三陸の姿になったと取材で実感しました。震災で町は831人が犠牲になり、6割近くの建物が全壊したそうです。復興までの間にそれぞれの場所でさまざまな人たちの努力によって今の地域があります。あの日、震災によって被災された方々の思いを無に帰さないために、自分よりも下の世代に伝えていきたいと思います。

### 減災へ関心持ち続ける　嶋　悠花　8年

皆さんのお話から、悲惨な出来事を伝えることへの葛藤や震災で負った心の傷が伝わってきて、語り部活動をすることの大変さを感じました。一番印象に残ったのは「東日本大震災は1000年に1度の災害ではなく、1000年に1度の教訓」という言葉です。私は震災の年に生まれ、震災の記憶はまったくありません。でも、そこで「私には関係ない」と言って避けるのではなく、「貴重な教訓だ」と関心を持つことが減災につながるのではないかと思いました。

### 記憶伝承 私たちが担う　鈴木　悠真　9年

被災した皆さんの当時の思いや決意に強い印象を受けました。ただ悲しい、悔しいだけでなく、その体験を繰り返さないよう、後世に残していくという強い熱意でした。今まで震災のことをある程度は分かっているつもりでしたが、取材を通してほんのわずかだったと気付かされました。私は震災当時幼く、記憶がほとんどありません。この先に生まれる子どもはその知識がさらに薄れるのでしょう。だからこそ、私たちが思いを受け継ぎ、伝えていくべきだと思いました。

### 水産復活へ熱意感じた　高橋芽衣子　8年

震災のことはテレビや本、ネットなどの情報でしか知りませんでした。実際に南三陸町を訪れて被災者のお話を聞くと、震災時の雰囲気が感じ取れると同時に、復興への強い意思が伝わってきました。戸倉Sea Boysの皆さんは、水産業復活に取り組み、震災前よりも良い環境で仕事をしていることを、とても生き生きとした表情で話していました。今回のプロジェクトを通して、南三陸町は着実に復興を遂げつつあることを体感することができました。